

集約された学術的な 薬剤師レジデントプログラムを実践 ～高度化する病院業務で即戦力となる薬剤師を育成～



薬剤部 薬剤部長
医学医療系 臨床薬理学 教授
ほん ま まさと
本間 真人 先生



薬剤部 副薬剤部長
医学医療系 臨床薬理学 講師
ど き こうすけ
土岐 浩介 先生

高度で安全な医療を提供するために、病院薬剤師には深い知識と技術が求められている。筑波大学附属病院（つくば市・800床）薬剤部では、2012年度から卒後研修として薬剤師レジデントプログラムを開始し、これからの病院薬剤師に求められる業務を集約したジェネラリスト教育と、専門薬剤師の取得を念頭に置いた専門的・学術的な考え方を習得するための教育を実践している。当プログラムの目的や概要、特長等について、履修中のレジデントの声とともに紹介する。

早く一人前になれるよう 工夫されたプログラム

筑波大学附属病院薬剤部では、2012年度（6年制課程の卒業者を対象とした薬剤師国家試験が初めて実施された年）から、卒後研修の場として薬剤師レジデントプログラムを開始した。当プログラムの開発に携わった薬剤部長の本間真人先生は、その理由について「病院で高度で安全な薬物療法を提供するために、病院薬剤師には深い知識と高い技術が要求されますので、病院薬剤業務に特化した卒後研修を整備することが望まれます。筑波大学ではレジデントを早く一人前にすることを第一義としたプログラムを作成し、今後活躍できる病院薬剤師を育てたいと考えました」と説明する。

当プログラムには、かつて本間先生が米国で受けたPharm.D教育での経験も生かされているという。1年目は広く一般的な薬剤業務を全般的に習得し、より深く学びたい場合は2年目に進んで、自ら志す分野の知識・技術に関する専門研

修を行うという仕組みになっており、個人のキャリアプランに合わせて選べるよう、1年ごとに修了証書を授与している。

薬剤師レジデントプログラムの 主な特長

当プログラムの特長の一つは、1年目に行う病院薬剤業務を集約したジェネラリスト教育だ。その内容は薬剤部の業務実態を反映し、毎年更新されている（資料）。副薬剤部長の土岐浩介先生は、年々増えていく多彩な業務をプログラムに追加しつつ、従来学ぶべき業務を削りすぎないように、習熟期間等のデータに基づいて一定のスキルを担保すべく調整しているという。ICUや手術室での業務まで経験できるのは、全国でも珍しいそうだ。

レジデント1年生の早坂あすか先生は、当プログラムを選んだ理由として「筑波大学では1年目に一般的な薬剤業務を幅広く学べ、しかもTDMや手術室業務まで経験できる。2年目には自分が希望する専門領域を学ぶことができ、その後の

キャリアにもつながっていくという点で興味を持ちました」と説明した。

2つ目の特長は、医師と薬剤師のレジデントと一緒に勉強する機会を持つことだ。筑波大学はチーム医療を担う人材養成に注力しており、職種間の垣根を低くする環境を構築している。薬剤師レジデントは研修医向けの診断・治療のレクチャーを受講でき、医師レジデントと同じ部屋にデスクがあり、相互交流が促されている。本間先生は「医師と接する機会を持つことで、処方意図を汲む能力を養うことができれば、研修後にどんなキャリアを選んでも、その能力は役立つはず」と評価している。

レジデント2年生の中村舞美先生は、自験例をレジデント学習会で発表し、他のメンバーから新たな気づきを得ることがよくあるという。「自分にはなかった視点に気づくことで、その学びを臨床で実際に返していくことができます。こうしてプロとしての考え方が身に付くのだと思います。」

3つ目の特長は、週に1回、論文の読み方や症例の見方、学会発表の仕方、レポートのまとめ方といった学術的な内容を学ぶ機会があることだ。レジデントとしての在籍中に1度は学会で発表することを目標としている。また、学ぶべき疾患群をカバーできるように工夫されている。

レジデント2年生の落合美伽先生は、「学術的なトレーニングを積むうちに、医師に対してもエビデンスを提示できるようになることや、カルテを見て介入すべき症例や疑義に気付くためのポイントが分かってきました」と述べた。

また、飯田賢先生はレジデント1年目でありながら、新生児に投与するための特殊な製剤を設計するという経験ができたという。「学生のときに勉強したことと臨床で実際行われていることが、最初は一致しませんでした。先生方の指導を通じて、学生時代での学びの意味が分かるようになってきました。それが当プログラムを受講して一番良かったことです。」

専門性を極めるための 基盤を身に付ける

筑波大学の薬剤師レジデントプログラムは、修了時に即戦力のジェネラリストとして働けることを主眼に置いている。それに加え、修了後のキャリアとして認定薬剤師や専門薬剤師を目指しやすい仕組みも用意している。例えば、筑波大学は日本医療薬学会の認定薬剤師やがん専門薬剤師、日本臨床薬理学会の認定薬剤師等の認定施設となっているため、当プログラムが研修の単位として認められる。

さらに2019年度からは新たな取り組みが始まっている。がん専門薬剤師の資格を取得するには、がん患者さんへの薬学的介入症例サマリを50症例提出する

必要があり、このうち10症例の記載をサポートするというものだ。土岐先生は「レジデント一人でいきなり症例サマリを書くのは困難です。当院のがん専門薬剤師等から指導を受けながら、まずは10症例を書けるように支援しています。そうすれば残りは自力で記載できるようになると考えています」と説明した。

実際のがん専門薬剤師を目指しているレジデント2年生の瀧澤聡先生は、有害事象が発現したがん患者さんに関して、医師に論文を提示し処方提案を行ったところ採用され、症状が軽快した症例を経験し、症例サマリとして記載できたという。適切な症例への介入およびサマリ記載という一連の流れが身に付いたと感じているようだ。

情報をクリエイトする力がある限り、 薬剤師は必要とされる

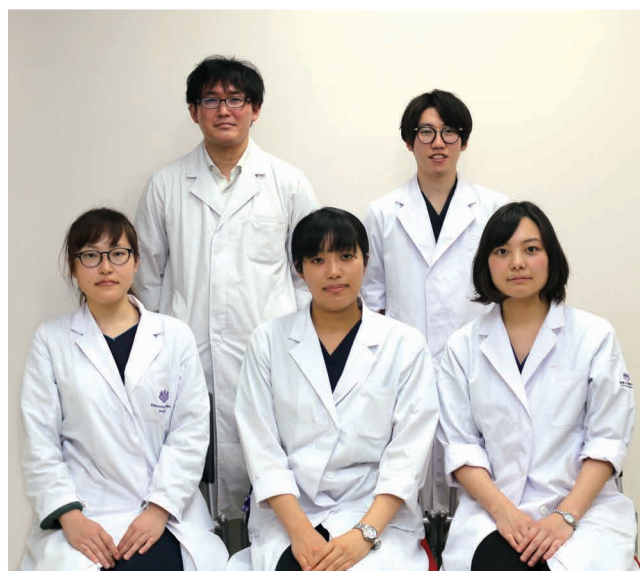
当プログラムは毎年のように更新・改善されている。日本薬剤師レジデント制度研究会に毎年参加し、他の大学等での良い施策を取り入れるとともに、自らプログラムを分析して発表、他のレジデント等とのディスカッションを経て、プログラムの改善点を考える機会となっている。本間先生はレジデントに「自分たちのプログラムの良い点や改善すべきところを考えてもらうことを通じて、教わる側としての責任感を持ってもらいた

い」と考えている。

今後求められる薬剤師像として、本間先生は留学先の恩師からの「情報をクリエイトする力がある限り、薬剤師として必ず必要とされる」という一言が印象に残っているという。「医療知識がすぐ更新される現代において、薬剤師にはリサーチマインドと考える力が非常に重要になってきます。当プログラムを通じて、レジデントには自ら情報を発信できる、あるいは業務の目的や意義を理解したうえで発展させられる力を身に付けてほしい」と述べた。

筑波大学附属病院薬剤部が実践している薬剤師レジデントプログラムへの応募者は、年々増えているという。病院薬剤師の多彩な業務が盛り込まれたジェネラリスト教育を受け、さらに専門的な深い知識と高い技術を身に付けた得難い人材が数多く輩出され、今後の高度かつ安全な医療の提供に資することを期待したい。

写真 レジデントの先生方



後列 瀧澤聡先生(2年)、飯田賢先生(1年)
前列 中村舞美先生(2年)、落合美伽先生(2年)、早坂あすか先生(1年)

資料 2019年度薬剤師レジデント初期研修プログラム

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
レジデントA	調剤・麻薬	外来化学療法	調剤(午前) 手術室(午後)	DI・TDM・製剤 (調剤 10時間/週)	小児	ICU	外来化学療法 (調剤 5時間/週)	小児	ICU	外来化学療法 (調剤 5時間/週)	小児	ICU
レジデントB	外来化学療法	調剤・麻薬	DI・TDM・製剤 (調剤 10時間/週)	調剤(午前) 手術室(午後)	外来化学療法 (調剤 5時間/週)	小児	ICU	外来化学療法 (調剤 5時間/週)	小児	ICU	外来化学療法 (調剤 5時間/週)	小児

筑波大学附属病院 薬剤部 提供資料